欲する者は、素養なかる可からず。然るに却つて徒らに遊戯に耽りて時間の賊たるもの多し。咄ッ彼等は謬れり。反省して醒めよ、早く！早く！

◎紳士たるものは眞面目ならざる可らず、一定の見識を具有せざるべからず。同情なからざるべからず。然るに我は當今の社會に於て、不公平、無主義、ゴマカシ、冷淡を旨とする多くの紳士を見たり。

（磁朗生）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

月は澄めり。過艇行を亂す。寂として聲なし。伏兵、伏兵、突如として警聲高し。

◎傾けば扑る、これ實に總て一般事物の通則なり。家傾けば則ち扑るゝを免がるべからず。否。傾くといふ事は即ち現に扑れつゝあることを意味するなり。更ゝ進んで言へば、この傾くてふことは一方重く、一方輕きが爲め、平均權衡を失したるより生じたる現象なり。元來、我が校はこの弊風なしといふを得ず。運動ゝ、遊戯に、一として彼等が傾くてふ習慣なき能はず。

◎運動の隆盛なるやよし。然れども是に傾くに至つては余輩は首肯する能はざるなり。學術と運動との平均を維持せざるべからざるは、よく人の口にする處。而かも能はざる處なり。

◎聞く「本校は他ゝ及ばざる處、優れる處、種々あり。優れる點は言はずもがな。然れども及ばざる點は大ゝ反省せずんばあるべからず。何ぞや、抑々其及はずとなす點とは？、

◎曰はく作文力これなり」と、余が是を聞きたる時一種の感を生じき。感とは抑々何事をか意味する？

◎他なし、その原因、そのものなり。余は沈思默考遂に一大原因の存在するを知るゝ至れり。一大原因！何ぞや、余は敢て言はんとす。否言はざらんとするも能はざるなり。

忽然として聲はあらず。松聲颯々、微かに聞こゆる鳴鐘、正にこれ……

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◎一流の輩ゝ阿諛甘言、他群の曹に唯々諾々海月的海鼠的所謂似而非眞面目、內又膏藥的の御方は吾人之を戴かず、否齒せず、何よりもかよりも大々嫌ひなり。

◎理想の低き、趣味の淺き、餘りに露骨なる、見解の皮想なる、口先の大なる、意氣地の小なる、形骸的表面流の奴は寧ろ憐れむに堪ゑたる哉、とは一道路の言。眞！

◎芹川原に球（ボール）を飛ばす快男兒幾多、飜て校の運動場に快哉を叫ぶ眞快男兒そも幾何、之れこれを稱して無氣力と云ふ豈に亦可ならずや。將亦眞ならずや咄ッ。

◎辨慶の木像あり、竈上に踞して意氣昂然、闔を超ゆれば木像則木偶のみ。世之を目してカマド辨慶と云ふ、宜なり、宜なり、吾の周圍、果して此人なきカ、喝ッ！

（天、S、生）

弦聲高く、飛矢一條、寂として又聲を聞かず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

雜報

○本校日誌摘要（自明治三十四年一月一日至明治三十四年九月三十日）

一月一日　新年拜賀式擧行廣田先生岡田先生新任初對面式擧行
八日　始業式擧行、
十日　矢板視學官佐久間縣視學來校
二月十一日　紀元節拜賀式擧行
二月二十日　小出先生新任對面式擧行
二月廿四日　第一回父兄懇談會開會
三月三日　多賀村に兎狩を催す
三月十一日　第一高等學校長狩野亨吉氏及び同校教授兼舍監谷山初七郎氏來校
三月十五日　以降一週間學年試驗執行
三月二十日　岡文部視學官來校
四月二日　第十三回卒業證書授與式擧行矢板視學官來校
四月七日　以降四日間入學試驗執行
四月十三日　入學式擧行
十六日　各級々長崇廣會各部理事任命式擧行
十七日　法學博士增島六一郎氏來校招魂社參拜
廿六日　第四高等學校教授藤井乙男氏同村上珍休氏來校
三十日　奥田先生新任對面式擧行
五月一日　本校創立第七回紀念式擧行水上部端艇競漕會を催す
三日　京都府第二中學校長中山再次郎氏來校
五日　皇孫殿下御降誕奉祝式擧行
十四日　西村捨三氏來校增田先生新任對面式擧行
廿一日　文部省實業學務局長岡田良平氏本縣商業學校長矢部善藏氏文部屬久保一郎氏滋賀縣屬青木倍氏來校
六月四日　海軍兵學校教授松井喜三郎氏來校
八日　演說討論部大會を催す
九日　三重縣第四中學校長高槻純之助氏來校
十一日　大垣中學校長吉村勝治氏來校
七月十五日　以降六日間第一學期試驗執行
八月十四日　愛知縣第三中學校長今井貫一氏來校測地學委員會出張員本校構内に於て重力及び經緯度觀測あり
廿八日　元本校教師リーラント氏來校
九月十一日　山本先生新任對面式擧行
十八日　新井先生新任對面式擧行
十九日　矢板視學官來校
廿二日　招魂社參拜
廿五日　劍柔兩道開始式擧行
廿八日　本縣商業學校教諭馬場正太郎氏來校
崇廣會各部理事及び水陸選手慰勞會を催す

○父兄懇談會　學校教育は公けなる教育なり、家庭の教育之に伴はずんば、如何んぞ學校教育の本旨を達するを得ん、如何んぞ、菁々の士を産するを得べき、學校は公けなる教育を施す、其の下宿樓上、蕩護に奢侈に、墮落なる生活を默許して、如何んぞ教育の趣旨を實行するを得ん、如何んぞ將來の中堅國民を養成する得べき、

蓋し學校の經あれば、家庭の緯なかるべからず、寄宿舍は絹家庭の如し、錦繡綾羅、於是歟、始めて見はるなるべし、

我校長大に爰ゑ觀るところあり、即ち其父兄を招集し、寄宿舍講堂に於て、第一回父兄懇談會を開く、子を思ふ親の心、弟を思ふ兄の情は、三千世界皆一ツ。遠く滊車、滊船を籍りて來集せる父兄は無慮二百余名、午前九時といふに聚合し、個條を別ちたる校長の懇話に父兄諸氏と大に議する所あり、午後四時頃會を終る、毎年一回、期を見て之を擧行するの約を結ばれぬ、

今回の擧、吾人は大に其稗益の莫大なりしことを信ず、雖然、今回其集合者の全數ならざりしを憾む、又期す來年の總會は、希くは其全數ゑ充たんことを渴望するもの也

因云、此懇談、會議の詳細は、別に父兄懇談會記事なるものあれば、爰に之を贅せず、

◎新年拜賀式　吾人青年の最も歡迎せし、明治三十四年一月一日新年拜賀式は本校講堂ゑ於て擧げられたり、

同日午前九時職員生徒一同、講堂に集り、君が代を三唱し、終りて後校長は　御影前に進み、恭しく開扉し奉る、一同最敬禮を行ふ、時に校長一同に代りて年賀を奏す、終て　勅語を捧讀せられ、次に再び君が代三唱して全く式を終へたり、

◎紀元節　二月十一日例によりて、二千五百六十一年の紀元節拜賀式を本校講堂に於て擧行せられたり午前九時体操教官に導かれ生徒一同入場、次で職員入場し、一同敬禮の後、君が代を三唱す、終りて御影の開扉あり、此ゑ職員生徒一同最敬禮を行ひ校

長祝意を言上せらる、次で勅語捧讀、終りて閉扉し奉る、茲に一同再び君が代を三唱し、次に校長、廣田先生の講話ありたり、於是校長式の終るを告ぐ、因て一同肅然として退場せり、

◎岡田先生を迎ふ　雪ふゞき、ころは新まる春としいへど、膚をつく寒さはなほ去りやらず、こゝに正月元日新年拜賀式の日、國語科專問の師として、加部老先生の外、尙又此先生を迎ふるの幸榮を得たり我校近來斯道發達せず、今や先生の敎鞭を受くると共に、如何ゟ斯の發達を見るに到るかは、吾人の夙に樂んで期する所なり、

◎城山雪戰　寒威を恐れて、爐邊に蟄居せんとするは、老人婦女子の事なり。血性有爲の男兒、宜しく壯快勇烈の擧あるべし。

二月十六日、朝來六花紛々として積雪五寸、誠に無上の賜なり。午後二時令下る、曰く今より全校生徒を二分して、城山ゟ雪戰を試みるべしと、衆湧躍の色あり、已にして部署定まり、防禦軍は、一半を南門に一半を東門に分遣して守備嚴肅、雪丸を堅めて今やおそしと敵の至るをまつ、攻擊軍は斥候によりて敵情を察し、大手搦手時を違へず両面合擊、喊聲天に震ふ。

両軍濠を距て、奮擊突戰、雪片飛んで雨の如し。巧軍吶喊城門に迫るや、守兵壘壁によつて三面齊しく打下し、或は搏ち、或は仆し、苦戰數時城兵固守してぬけず。

已にして南門破れ、東門の兵次で卻く、両軍皷譟、坂を攀ぢて直ちに第二門に攻入せんとす。忽ち一騎馳來り告げて曰はく、山上地雷火の裝置あり、暫く山麓に待てよと、之を聞いて逸りにはやる壯士、腕を扼して待つこと少焉、いざと計りに打入りぬ、向ふ所皆破れ、進んで第三門に迫る、城兵堅守、殊死して戰ひ殺傷算なく、攻擊まず〳〵甚だし、遂ゟ城門を排して山頂に到り、こゝに全く城山を占領せり

時に休戰の喇叭響き、兩軍列を整へて、山を下る、玉汗滴々、戎衣爲めに霑はざるものなかりき。

◎小出先生を迎ふ　林久太郎先生去りて故郷に往かれしより、最も困難なる理化の敎を聽くに師なく、意ならずも數月を無爲に過ごし、師を待つ心の遠々しく、終に今日ゟ到りしが、こゝに吾人は工學得業士小出先生を迎ふるを得たり、生等の欣喜例ふるに物なし、寥々として人待ち顏なる理化敎室、期せん哉、光澤ある理化器械のまず〳〵室内に充つるの日を、尙待つ生等此課に一百点を握り得るの時を、

二月廿日、雨天体操場に先生の温顏に接せし時、いかに此念の勃々として胸を衝きしかゟ、

◎兎狩　試驗の難關、面前に横はり、月を超ゑずして、學暦將に改まらんとする時、雪中兎狩の壯擧を見んとす。豈に、吾校風振起の兆にあらずとせんや。

三月三日、昧爽雪を踏んで集まるもの、僅かゟ百二十餘名、殘るものゝ多くは、或は病氣と稱へ、或は事故と僞て、巧ゟ此行を逃れ、爐火の邊、忽卒試驗の準備をなさんとする、怯懦賤陋の徒のみ、吾人はこゝに至りて、再び校風の不振を嘆々せざるべからざる也、噫午前八時發程、高宮村を經て、敏滿寺村に到る、里人爲に獵夫十數人を雇ひて、斡旋し、諸備を整頓せらる、一行は溜池のほとりゟ、薪を折り焚きて、互ゟ暖を取り、われこそ捕兎第一の功を奏せめと、勇み語らひつ、暫にして獵夫を率ゐて山林に入る、左右翼を放ちて、總員一直線に散開し、各々棍棒を揮ひて、且つ打ち且つ呼ぶ、荊棘と云はず、茂樹といはず、殘る隈なくふみ入り、追ひ立てたれど、初めの程は、かゝる林中運動に熟せざるより、散兵線整はず、あはれ二兎を逸してけり。

茲ゟ於て、衆大に共同の要を曉り、互に相警むる所あり。第二回、亦獲ず。第三回、始めて一兎を獲たり、衆萬歲と呼ぶ、第四回獲る所なし、一同是に於て晝飯す。

時に、前山俄にかき曇り、鵞毛片々空に舞ひぬ、朔風衣を掃ひて、勇更に加り、寒威身をおそひて、氣まず〳〵剛なり。

第五回、又一兎を獲たり、衆再び萬歲とよぶ。第六回獲ず、轉じて寺屋敷てふ山地に向ふ、亦獲ず。

已にして時移り、雪益降る、乃ち山下に焚火し、駈足にて歸路に就く。

因に云ふ、長友犬上郡長、此行に就き百方斡旋の勞を取られたり、附記して深く其好意を謝す。

◎第十五回卒業証書授與式

時維れ四月二日、花は爛熳、天地長閑なる春乾坤、午前九時より本校講堂に於て、年々歳々積めば重なる、創立以來三五、十五の卒業證書授與式を擧げぬ、仰げば金龜の城梢樹騷がず、鳥は美妙の聲に謠ひ、俯せば琵琶の湖上波起らず、舟はそよふく風に孕み、旭旗校門に翩々として證書手にもつ人を迎へつ、

來賓には矢板本縣視學官を始とし、朝野の縉紳、高位高官の人々列席せられぬ、まづ「君が代」の三唱を終り、校長の　勅語奉讀ありしが、次に卒業生、卒業證書を授與され、又校長は徐ろに立ちて本學年間の學事報告あり、其要領を擧ぐれば下の如し、

明治三十四年四月二日第十五學年卒業證書授與式學事報告、

一卒業生徒に關する報告、

一卒業すべき第五年級生徒數　三十八名

內

試驗に合格し本日第十三回卒業生として卒業の者、　三十一名

病氣の爲め十ヶ月缺席し原級に止むる者、　一　名

病氣の爲め試驗なるも卒業見込の者、　六　名

二本日卒業者三十一名並に追て卒業見込の者六名計三十七名、

內

在籍地　本縣人三十名、他府縣人七名、

年　齡、最高二十一年二ヶ月、最低十七年二ヶ月、平均十九年一ヶ月、

三本校卒業生徒數、　自第一回（明治二十二年）至第十三回（同三十四年）

第一回	明治二十二年七月	十　人
第二回	二十三年七月	十四人
第三回	二十四年三月	十一人
第四回	二十五年三月	十四人
第五回	二十六年三月	十七人
第六回	二十七年三月	十六人
第七回	二十八年三月	十六人
第八回	二十九年三月	十　人
第九回	三十年三月	十三人
第十回	三十一年三月	十七人
第十一回	三十二年三月	三十九人
第十二回	三十三年三月	二十八人
未濟にて後日卒業の者		四　名
第十三回	三十四年三月	三十一人
未濟にて後日卒業見込の者		六　人
計二百四十人		

二一般生徒に關する報告、

一三十三年四月即ち第十五學年の始め在籍生徒數　三八九

之れを前學年の始めに於ける生徒數に比すれば四十八人の增員とす、

二本年三月學年試驗前在籍生徒數　三六五

一學年間生徒の退學轉學等の爲め生徒數の減すること二十四人、六分弱に當る、

三本學年試驗に出席したる者、　三四九

四病氣其他止むを得ざる事故にて缺席したる者、　一六

成績合格者　三二一

內

不合格者　三〇

二學年引續き不合格にして除名せられたる者　一

試驗未濟なるも合格の見込者、　一〇

病氣の爲め原級に止むる者、　三

三生徒養成に關する報告、

此項は前學年に於て爲したる報告と大差あるともなし但前々學年に於て生徒數三分の二以上の志望者を得ざるが爲め行はざりし修學旅行　十一月五日より十日に至る

を前學年に於ては二百四十九名の志望者即三分の二ありたるを以て日程六日間湖北西を巡行せしめたる其他高宮附近に於て

發火演習　十月十三日

多賀村大字敏滿寺に於て

兎　狩　三月三日

各一回を擧行し又

第一回父兄懇談會　二月二十四日

を本校寄宿舍講堂に開設し何れも眞好の成績を得たり

四寄宿舍に關する報告、

一本學年四月に於て舍生四十七名なりしも漸次增し學年末に於ては六十六名ありし

二六月十日新たに攝生の一室を設け疊敷となし脚氣患者の利便を圖る、

三前年度末に於て北面下水長さは八十五間深さ三尺を修繕したるに頗る効あるを以て更に東面より南面に鍵の手なりに長さ百四十間深三尺六寸の下水を新開したれば卑濕の地變じて乾燥健康の地と爲る、

四規律ある協同生活の練習は益其歩を進めつゝあり、

五舍生漸々增加するにより來學年は一時應急の爲め自修室寢室を混同し疊敷に改造し百三十八名を收容するの設備をなし以て三十六年度の改築を待ふ、

右終りて矢板視學官徐ろに立ちて左の祝詞を朗讀せられたり、

爰に本校第十三回卒業證書授與式を行ふに方り

卒業生諸子の榮を祝し併せて一言以て諸子に告くる所あらんとす夫れ國家の隆替は中堅國民の能力如何と重大の關係を有すること固より言を俟たす今や內大に公德の修養を力め外盛んゑ國勢の伸張を圖るべき時に際し學術に事業に將た識見に人材の輩出を俟つこと頗る急なり諸子能く既修の智德を資とし今後倍々研鑽勵精進んで健全なる地歩を占め以て社會有用の人物たらんことを期し併せて本校敎員、諸君が熱心なる薫陶の勞ゑ酬ひられんこと是れ本官の希望して已まさる所なり諸子其れ旃れを懋めよ、

明治三十四年四月二日

滋賀縣視學官從六位　矢板寛

次で、卒業生父兄總代湯本源藏氏、祝詞を述べらる、則ち下のごとし、

維時明治卅四年四月二日滋賀縣第一中學校第十三回卒業證書授與式を擧行せらるゝに當り不肖等其末席に列するの光榮を辱ふす、

抑も卒業生諸氏は多年の艱苦を嘗めて勉勵忍耐し遂に本日の榮譽を見るゑ至りしは獨り卒業生の爲めに賀すへき而已ならす本縣の爲め國家の爲め祝すべきことなり是れ校長及諸先生の敎鞭宜しきに依りて來るや明かなり亦卒業生父兄等の深く感謝し且喜悅するに耐へさる所なり今や卒業生諸子は智德の要素既に備はり益々進んで實業に從事すると專門の學校に入るとを問はず他日社會の上流に立ち以て國家の元氣と爲るべきものなり然れば則前途の責任は重且大なりと謂ふ可し希くば卒業生諸子能く此責任を全ふして今日の恩に報はれんことを、

謹て校長閣下諸先生の誠實なる敎導の厚意を謝し併せて希望を述べ以て祝辭に換ふ、

卒業生父兄總代　湯本源藏

こゝに本校生徒總代廣瀨助一郎氏、進んで左の祝詞を讀上げらる、

今玆に本校第十三回卒業式に當り謹て微言を呈して祝賀の意を表し併せて希望を開陳せんとす諸氏は多年螢雪の勞空からずして今日卒業の光榮を擔ひて將に我校を去られんとす諸氏が今日の光榮は實に多年の困苦を償ひて餘あり然れとも光榮の裡面ゑは重大なる責任あり諸氏は進みて軍人となり學者となり政事家となり實業家となるも均しく國家に貢獻すべき責任を有するは一なり諸氏は今玆に中等敎育を卒へて將來我國の中堅國民たるものなり抑も一國の盛衰は擧げて中堅國民によりて支配せらるゝ事は言を待たず然れば國民の盛衰は擧けて諸子の雙肩ゑ懸れるなり諸子の責任重且大ならずや之を思へば諸氏何ぞ小成ゑ安んずる可けんや今や天下の形勢は日に益々多事にして邦家の經營實に容易ならざるなり諸氏乞ふ奮勉努力せよ終ゑ臨みて諸子に囑望すへきは諸氏ゑして今日校門を辭するも多年の友誼を忘るゝ事なく希くは切々忠告の情をつくされんことを、吾等亦諸氏の指敎に鑑み益々自修する所あらんとす聊か愚衷を吐露して以て祝詞に代ふ、

明治三十四年四月二日

滋賀縣第一中學校生徒總代　廣瀨助一郎

最後に、卒業の榮を荷はれたる三十七名の總代として伊藤利三郎氏、徐ろに左の答辭を述べらる、

維時明治三十四年四月二日本校第十三回卒業證書授與式を擧行せらるゝに當り本縣知事閣下並に文武顯官縉紳諸君の賁臨を忝ふし加ふるに懇切なる訓諭を以てせらる生等の榮譽何ぞ之に加へん

顧ふに生等の菲才謭劣を以てして能く今日に至りたるは偏に校長閣下並に諸先生の薫陶敎誨の懇篤なるに依らずんばあらず語に曰く驥騄一日千里駑馬十駕して之に及ぶと生等固より諸公の盛意に副ふ能はずと雖も而も多年の敎訓を導守して愈益勵精せば或は鴻恩の万一に報ゆるに庶幾きを得んか、知事閣下並に校長閣下の訓諭を

承け生徒諸君の祝辭を添ふして感激措く能はず聊か蕪辭を陳べて奉答す、

明治三十四年四月二日　卒業生々徒總代　伊藤利三郎

右終るや、再び「君が代」の三唱をなし、終りて各年級正副級長、及び一學年間無欠席者、崇廣會各部理事、寄宿舍寮長、炊事委員等に向つて、過古一ヶ年間の功勞を酬ひんが爲め、各賞品を授與され、是より於て全く式を終る矣、

式後、例よりより來賓諸氏及卒業生一同を別室に延き、茶菓を饗せり、

見よ！、旭旗春風をひらめく我校門、松梢惠風に琴弾く城山の、今方を新たなる中堅國民の、譽れの門出を見送りつゝあるを！、右卒業生諸氏の姓名を擧ぐれば

岐阜縣	田川七右衛門	二〇、〇二	
犬上郡	伊藤利三郎	一九、〇二	
同	北村健藏	一九、〇三	
犬上郡	八木原太郎作	一七、一一	
福井縣	平瀨保之介	一八、〇〇	
坂田郡	大橋愛造	二〇、〇二	
犬上郡	花木實	一八、〇六	
同	松見惠觀	一九、〇二	
同	力石知義	二〇、〇二	
同	高原覺應	一九、〇三	
同	木村茂	二一、〇〇	
伊香郡	長澤慶三	一九、〇二	
蒲生郡	西川嘉市	一八、〇六	
計		三十一名	

試驗未濟卒業見込ノ者

福井縣	京藤政太郎	一九、〇五	
東淺井郡	中村修	二一、〇〇	
滋賀郡	鈴木泰造	二二、〇五	
伊香郡	中川甚藏	二〇、一一	
犬上郡	石居英次郎	一九、〇八	
佐賀縣	小出清一	一八、〇六	
高島郡	多胡庄次	一八、〇三	
愛知郡	中村進	一九、〇二	
伊香郡	布施卷太郎	二〇、〇〇	
高島郡	鈴木嘉藏	二二、〇二	
犬上郡	青山哲四郎	一七、〇四	
蒲生郡	小西龜藏	二〇、〇四	
高島郡	早川清三	一九、〇〇	
犬上郡	布部孝太郎	一九、〇一	
坂田郡	吉居房次郎	一七、〇九	
蒲生郡	田中藤馬	一九、〇四	
岐阜縣	古山治吾平	一九、〇九	
高知縣	吉松茂彦	一七、〇二	
新潟縣	大竹英之助	一九、〇一	
犬上郡	山本捨太郎	二〇、〇五	
同	橋本太郎	一七、〇七	
同	湯本信雄	一八、〇九	
東淺井郡	伊吹清一	二〇、〇二	
滋賀郡	牧秀賢	一八、〇三	
計		六名	

（因に誌るす右六名に對して八月盡日迄よそれぞ〳〵卒業証書を授與せられたり）

◎京都帝國大學第三回陸上運動會　京都帝國大學第三回陸上運動會は四月三日を以て同運動場に於て擧行せられたり、例により本校は山本小五郎氏を以て撰手とし澤村專太郎氏を副撰手とし他に監督一名を以て同月二日出發せり。

三日此日朝來曇天動もすれば雨ふらんとせり、午前九時各撰手宣誓式あり、午前中は大學會員の「ロンテニス」試合あり、午後一時競技始まる、競技場は略長方形にして南北に長く周圍約三百メートルと云ふ、場の東隅は內外貴顯紳士の來賓席にして其他三面は近縣諸學校生徒及其他の觀客を以て周らし午後一時と云ふにさしも廣大なる運動場も恰ど立錐の餘地なかりき、

第一回百メートル競走より長飛、三百メートル競走棒飛等順を追うて終り遂に第九回となりぬ、此ぞ本

日の主眼たる隣府縣が十六校よりなれる義勇旗競走なり、時午後一時五十五分十有六の健兒は一發の號砲と共に發点を放れたり、其迅速なる疾風の如く觀者をして殆んど目眩せしめきあはれ表勝旗は遂に大坂一中の手に落ちぬ、嗚呼勝敗もとより天にあり勝者必しも譽るに足らず敗者亦未だ必しも毀るに足らず且それ勝て驕り敗るれば、恥づ、恥る者は奮ひ驕る者は怠るこれ人情の弱点なり、然則今日の敗者安んぞ他日の勝者たらざるを知らんや、請ふ勝者怠るなかれ敗者益々奮ふべきなり、

第十一回啓發旗競走此れ亦兵庫師範の手にする所となれり、かくて全く了結せしは午后四時廿分なりき例はよりて茶話會を催さるべき所惜哉降雨の妨ぐる所となりき、終りゑ臨み同寄宿舍に於て撰手等の厚遇せられしを謝すると共に又同校の時間其他諸般の嚴格なりしには敬服の至りなりき。

◎第三高等學校端艇大競爭會　時正に四月十一日比良の雪融けて琵琶湖の水暖なる時、第三高等學校は大津三保崎に於て端艇大競漕を執行せらる、我校又招聘に應じ、老練なる七健兒を撰出し、副部長小出先生理事奥村氏と共に盛會に望むを得しは幸榮と云ふべし、本日午前九時開始せらる、競漕十數回の後、暮色蒼然淡烟海を籠め三井の晩鐘響き渡る時、愈々來賓競漕は來れり、我對手は京都一中、千有餘名の生徒より、撰みに撰みし鐵腕剛身の勇將實に恐るべき强敵と云ふべし、然りと雖も　何ぞ憶せん吾撰手、兼て鍛ひし此黑腕、連日練りし我伎倆、今ぞ試さん時期なりと、勇氣凛々として待てり、既にして両艇蒸氣船ゑ繫がるゝや、暫時ゑして遙に千米突の沖上に浮べり、忽ち轟然發漕の號報水面を渡り、勉め勵めの應援の喧聲、或は岸に、或は和船に囂然として恰も天を破るが如し、嗚呼連日の練習、今や寸時の間に勝敗定まらんとするなり、漕手の胸中思ひやるべし、

勇なる哉快なる哉、再び快勝の一發と共に、二艇身の大差を以て、名譽なる月桂冠は遂に我校に歸し、滋賀一中萬歳の叫喊四方に聞ゑ金色燦然たるメダルは我撰手の掌中に落ちたり。

諸氏の勳功名譽や偉且つ大なり、啻に七子のみならず實に吾校の榮譽と曰ふべし、吾人茲に本日の大勝を祝すると共に併せて厚く其勞を感謝す、左に七健子の芳名を掲ぐ、

仙波久良、下村紫朗、花木榮三、室谷喬三、藤田義亮、村上善正、岩崎健三、

◎十六學年始業式　四月十一日入學式を終るや、直ちに講堂に於て始業式を擧行せらる、職員生徒一同入場し、先づ一同敬禮の後君が代を三唱し、次で校長　勅語を捧讀せらる、終れば校長及び坂田先生の講話あり、かくて後一同再び君が代を三唱し以て式を終へたり、

◎入學式　天麗らかに晴れたる四月十三日、運動場に於て入學式を擧げられたり、まづ午前九時の號報にて、故參生は東側に新入生は西側に整列し、市瀨校長は立ちて徐ろに左の訓示を與へられぬ、

今こゝゑ入學式を擧ぐるに際し、一言諸子に曰はんと欲するものあり、元來本校は家族的制度を以て校紀の振肅、生徒の親和を圖らんとするものなれば、極めて「長幼の序」を尙ぶ、兄よく弟を慈しみ、弟たるものよく兄に從ひ、相互敬愛の心を以て相接する時は、一家よく一致和合すると同じく、故參生にしてよく新入生を誘導し、新入生にしてよく故參生に服從すればこれ即我校の本旨と淸ふべきなり、諸子よろしく意をこゝゑそゝぎ、決して長者は幼者を虐げ、幼者は長者を凌ぐが如き振舞あるべからず、正ゑ献身的敬愛の精神を以て日索相接し相勵むべきなり、これ聽がて國家中堅の人材たるべき階悌ゑ外ならず、こゝに入學式に際し、故參新入兩生徒に對し我が望むところのもの唯これのみ、

希くば忘るゝこと勿れ。

と、こゝに於て新入學生總代西川修造氏いでゝ一場の挨拶を故參生に述べ、故參生總代廣瀨助一郎氏之

と答ふ、こゝに全く、式を終了す、時に九時を過ぐる三十分

因云、本年は入學志願者募集人員に超過したるを以て、四月六日より入學試驗を執行せり其結果第一年級へ百廿名第貳年級へ一名の入學を許可せり、本年は例年の如き校長の遊説もなかりしに拘はらず、かく超過の現象を見たるは、是れ全く本縣中學教育思想の發達せし一証として見るに足らんか、今や我校裡實に四百有餘の鳳雛を納れ、校風漸く揚がらんとす、

◎法學博士增島六一郎君の演説　四月十七日、本縣先輩增島法學博士來彦の序を以て同日午前本校講堂に於て生徒一般へ數十分の懇篤なる講話ありたり、其大要に曰はく、

余は今より數問を諸君になさんとす、本校より彦根停車場までは凡そ幾分時を要するや、(一生徒、凡そ十分を要すと答ふ)、そは東京の步調なりや、將た彦根の步み方なりや、生徒答ふ、(勿論當地方の步調なり)、又諸君は既に植物學(ボタニー)或は動物學(ズーロヂー)を終へられたるならん、されば此の近江國には如何なる植物又動物の蕃殖ありや、又琵琶湖には如何なる魚類棲息するや、尙ほ當彦根はマラリヤ熱の流行地なり此れは全く何に原因するや、以上既に御研究なれば乞ふ答へよ、若し未だなれば次回までに御研究あらんことを望む、

抑々學問の要は活學活智を求むるにあり、人の智を磨き業を爲すに就ては學校に於ける書物上の勉强亦固より大切なりと雖、而も僅かに是のみを以て足れりとせず、尙ほ進んで廣く眼を人生の實際に注ぎ以て大に活學活智を得るの工夫なかるべからず、實に學問とは單に書を讀み學を講ずるの謂にあらずして寧ろ廣く人事百般に通曉する一種の方便にすぎざるなり、又人の最も切要なる行爲は其の責任を全ふするにあり、若し人にして其の責任を盡す能はずんば人たるの價値を失ふに至る、豈に鑑みざるべけんや、方今文明長足の進步をなし强食弱肉の活劇は將に旺盛ならんとす、この復雜なる社會に處して國家の体面を維持せられんとする青年諸氏の責任實に重大なり、豈に猛省せざるべけんや、徒に死學をなして可ならんや、たとへ幾多の讀書をなすも、死せる學問何の効をか奏せんや、しかるに世人往々學問の本旨を誤まり徒に試驗点數のみ汲々として機械的勉强を之れ事とし以て終はれりと思意するもの誠に尠しとせず、實に國家の爲め大に嘆息すべきなり、苟も明治の聖代に遭遇し文明の教育を受けらるゝ青年諸君は、常に心を此の邊に存し孜々として活學活智を求め以て他日有爲の人士となりて、各々其の責任を全ふせられんことを希望してやまざるなりと。

◎井伊伯爵歡迎　彦根舊藩主井伊直憲伯は這般藩祖三百年祭の執行せらるゝに付、一度び此土に歸へられ、我校の沼革史上遺るべからざる伯が、温顏に接するの榮に接しぬ、

抑々明治二十年、彦根公立中學校の時代より、伯が我校の爲に盡瘁せられたる所は幾何ぞ、今日滋賀縣第一中學校の巖として、昔ゆかしき城山の麓に聳ゆ、四百有余の師弟、學を習ひ、道を修め得る所以のものは、ひとり伯が恩に非ざるなきを得んや。三月十二日、今や伯は、此故郷に歸らる、吾人の喜悅、何者か之に過ぎん、今日しも天雪を降らす、雪か、霰か、雹か、鎗か、何のその、吾人は校長始め諸先輩と共に、欣然雪中に雀躍して、停車場に向ひぬ、雪は霏々として、校帽を撲つ、氣は勇み、足は躍りて、伯が温かき厚恩を知るのみ、

山なす人、縉紳、庶民、もとより、伯が舊恩に接するものは一人として之を餘さず、停車場邊、唯々人の山を見るのみ、

温顏の一丈夫、これなん井伊直憲伯其人にして、吾人が舊恩主其人なり、温容威笑を湛へて、一場の辭を賜ふ、衆心唯々一片の悅と、一片懷舊の情あるのみ、已にして伯は一同に迎へられて、車に乘り、千松館へ向はる、

因に云ふ同十八日我校職員生徒一同よ、饅頭を附

與せらる、井筒と橘の燒き印し、有難くも厚恩を懷ふて、拜領しぬ、即茲ゑ感謝の意を彰はす、

◎大洞沖水上運動部端艇練習會　三百年祭の爲め、歸產せられたる井伊伯爵は再び去つて、東都に往かれんとす、我校の爲に一方ならぬ配慮を給ひし伯爵、吾人は今や眷戀の情に堪へず、今や感謝の意胸に充ち〳〵、聊かなりとも、微衷を捧げて、之に酬ゐんと欲する念已み難し、機や恰好し、時方に端艇練習の盛時期、於是歟、各艇練習の狀を以て、一覽に具へんものをと、即伯を招請して端艇練習會を催す、日はこれ、四月十八日、回數僅に六回の數、此他和船レース、撰手レースにして、凡て漕手は校を擧りし斯道の達人、此道の逸物、航程八百メートル、春は彌生の浪も穩に、花はさかりの長閑なる、湖邊滿面の景色、青よ赤よ、白負けな、と應援の聲沖一面にひゞき渡り、オールは暉に光りて、ピカリ〳〵と、なばゆきながめ、クラッチの音勇ましとも勇ましし、汗に濕ふ各艇の漕手は、伯が瀏覽の榮を得て、意氣昂然、スタイル健な氣なり、腕は黑鉄、鍛ひに鍛ふ、いづれ五月一日の、晴れの場所に、あらはす伎倆のはゐ〳〵しさ、ナニ負けるものか、とオールを操つる、額の青筋、賴母しや〳〵。此日余興として和船とボートのレースを試む、棹は今しも折れんばかり、櫓をおす音のいそがはしく、水漕くオールは、ガバリ〳〵と悠長に、落付いて迅き、ボートの進行、やがて勝は三分十秒を以て、ボートに歸しぬ、

六回、……七回……番外の序を追ふて終る內、湖上一面の薄霞に、ひゞく城山の時の鐘、ゴーン〳〵と五時を報じて、余音嫋々、辨天山にひゞき渡る、此日伯よりは又夥しき賞與を附與せられたり、謹んで感謝の意を表す、知らず、吾人が素志、聊かなりとも、達するものあらば幸甚、

◎奧田先生を迎ふ　四月卅日、生徒一同体操場に聚合するや、奧田先生音吐朗々として、初對面の辭を述べ給ふ、余輩是の良先生を得たるを悅ぶ、今や英語の必要を感ずること日々に切なり、冀くは我校をして英語の爲に、他に一歩も輸せざるに至らんことを、偏に先生の指導を乞ふ、

◎皇孫殿下奉祝式　かけまくもかしこき、雲の上の御事ながら、明治卅四年五月五日、瑞雲靉靆として立ちなびく裡に、皇孫殿下御降誕遊はされたりと洩れ承はりぬ、上は雲上のかしこきあたりより、下は靑人草の吾々に到るまで、あな、かしこくも目出たく祝ひまつる御事なり、我校職員生徒一同は本校講堂に於て、遙に、奉祝式を擧け、一同先づ君が代を三唱し、終つて校長、御宸影を拜して奉祝の辭を陳べ奉り、序いて、御誕生御命名のかしこき由を謹述し、次いて又君が代を三唱して此めでたき式を終りぬ、

◎土俵場と角力　角力といへば、回向院の本場所が浮び、常陸山が思出され、大砲梅の谷、が心の中に湧き出るは常なるが、我校裡今日土俵場を設けられたるは、こよなき悅にこそ存ずれ、吾人は角力取となるに非ず、又取らざるにも非ず、「右は角力道四十八手の中に候はず、」とか何とやら、いふが如き六ケ敷取組なも非ず、吾人が角力は体骨のみ、体育のみ、精神のみ、寄宿舍の裡、夕食の號柝響いて後、暫らくあつて、「イヨッ」「コラッ」「ヤッ殘ッた〳〵」「エイヤはッけ」の聲諸共、痞せた体軀も何のその、運動と精神の二つで、渾一つ、轉んだり、跳ねたり、砂まみれになるがうれしく、手も知らねば、道も知らず、投げつけられても、「何だ糞ッ」と、又飛び上がるが、一つの精神、これなん吾人が角力にして、今日の其旺盛、土俵場の繁昌思ひやるべし、

◎水上運動會　本校水上運動部は例年の如く、五月一日を以て、山水明媚なる大洞入江ゑ於て、春季大競爭會を擧行しぬ、當日會所の飾付は例年の如く、國旗紅灯綠松靑波の間に隱見し、其盛況云はんかなし、

先づ本日は、本校第十四回創立紀念日に相當するを

以て、講堂に於て此れが式を擧げたる後、競爭會にと取りかゝりぬ、此の日や天氣晴朗、湖上波靜にして、碧濤を湛へたるが如く、實ょ得難き好競漕日なりき、吾が三百の健兒が當日白赤綠の裝いさゝましく、日頃鍛練の鉄腕いざ試み呉れんと、花々しく競漕せし有樣は、予が拙筆且つ此の道に暗きものゝ到底盡す能はざる所なれば、大畧のみを左に揭げん、

第一回、白(笙)赤(冲)綠(多景)の三艇は一發の號破と共に、鏡なす湖面を滑るが如く進みしが、廻航の頃より白の勢强く、遂に七分十秒を以て白の勝となりぬ

第二回、赤元氣よく遂に四分四十五秒を以て勝を制しぬ、

第三回、七分四秒にて白の勝となりぬ、

第四回　此れも同じく七分四十秒ょて白の勝、

第五回、六分十五秒にて綠の勝となりぬ、此の時綠の勢優に他の二艇を拔きたり、

第六回、第七回共に綠の勝にして、前は六分四十五秒、後は六分五十四秒、

第八回、白の勝にして、七分十秒、

第九回、さすが摸範競漕、撰手が鍛練の腕前、實ょ感服の外なかりしが遂に勝は六分十三秒にて綠に歸しぬ、今其の競漕の樣を簡單ょ評せば、熟れもさのみ優劣なき立派なる競漕なり、

第十回、七分十秒にて白の勝、

第十一回、七分三秒にて、又白の勝、

第十二回、此れも七分十五秒にて白の勝、

第十三回　第十四回共に赤の勝となりぬ、前には七分十秒、後には六分五十六秒

第十五回、此れ實に當日最も衆觀の目を引きたる、各級撰手競漕なり、翻々たる名譽ある表勝旗は果して誰れの有に歸するものぞ、赤(五年)?、白(四年)?、綠(三年)?、忽ち號砲は響きぬ、堵の如き岸上の觀者は、拳に汗を握りて、其の綠鏡を破り、白波を躍らし、奔龍の如く進む三艇の端に心魂を飛ばして、暫し熟視してありしが、さすがは年効の致す所か、遂に五分五秒にて赤の勝となりぬ、今此の名譽ある五年級の撰手を擧ぐれば、

舵手、山本三郎、整調、下村紫郎、五番、岩崎健三、四番、村上善正、三番、島田善次、二番、伊藤國利

艇舳、奥村房次郎、

此の競漕に於て、孰れも其の勇壯なること、神速なること、實に觀者をして、舌を捲かしむる程なりしが、殊ょ赤白の二艇は好敵手にて、綠は恰ら競漕外のもの〻如かりき、始めスタートに於て早や赤は二艇進計り先じたりしが、白もさるもの、何後れじと神秘の妙技を出して、漕ぎ寄り〳〵、互に鋒(シノギ)を削る樣、雙龍玉を爭ふとや云はん、實に其の意氣込みの盛なる、佐々木梶原の二猛將、先鋒を宇治川に爭ひしもかくやと思はる計りなり、かくて廻航に於ても白いと敏速なる樣に見受けしが、何分始めより赤に拔でられしこと多かりし爲め、遂に勝は赤に歸せしなり、

さても今日大競漕會ょ大勝利を得たる名譽の五年級は、先登に表勝旗を高く揭げ、凱歌いさましく、晩靄模糊たる間に其の影を沒しぬ、扨此に附記す可きことあり、そは本縣商業學校生徒同じく農學校生徒の來りしを以て、第十一回と第十二回との間に於て二校の生徒を一組に混じ本年本校卒業生と競漕を行はしめしが、遂に卒業生の勝となりしとなり、

抑二校のスタート、並に廻航の如き巧にして勢ありしが、歸航中に勢頓に挫けしがば遂にかゝる結果を來せしなり、

◎西村捨三氏の演說　能辨江河を懸くるが如く、才鋒玄理を鉤するが如きも、猶能く人を感せしむる能はず、只一片の熱誠ありてこそ、始めて聽衆の同情を惹き、感慨措く能はざらしむるものなれ、五月十四日、本校に於て演ぜられし西村捨三翁の演說こそ、語々皆熱血より成れるものと云ふ可けれ、翁は來年を以て耳順ょ達する老体にてありながら、其の氣力の勇壯なる、少壯の人にもおさ〳〵劣らざる計りなり、

翁嘗て大阪に在りし時の所感三つを擧げて云はく、

一、今日の政府は實に無能にして、國費の如何を顧みず、徒らに校域の狹小よ喋々し、僅か一介の小學校建設に要する經費をすら十萬圓の多きに達せしむるとか、實に現今政府の定むる所の學校規則は、疎漏膨大に過ぐるもの多し、人民たるもの宜しく拮据經營、自治の精神を養はざる可からず、

二、南朝衰微の時に當り、忠臣義士の奮起せしもの多し、而して後人此等の人を廟祀す、然るに獨り、忠臣の巨擘とも稱す可き小楠公よ至りては、未だ之れを祭祀する者なかりしかば、先年余河内巡回の途次、四條畷を訪ひ、深く忠臣古蹟の草昧に屬するを嘆き、有志を募りしよ、立ちよ拾萬の大金を得たりしかば、爲めに社を建て官に乞ひて、別格官幣社の號を賜りぬ、又別に鉄路を布設し、衆民參詣の便を得せしめ、以て國民教育の一扶助たらしめんとせり、

三、小楠公と同年にして、豊臣氏の爲めに忠勤到らざる所なかりしは、木村重成其の人なり、彼れや朝廷に對しては直接に盡せし所なかりしとは云へ、其の眞心に至りては何ぞ又小楠公と異ならんや、予世人の此の人をして、空しく暗昧に歸せしむるが如きことあらんを恐れ、爲めに再び有志を募り、碑を建て、永く其の芳名の湮滅せざらんことを謀れり、

諸君よ、諸君よ、諸君は予を以て、妄りに泣き男となす勿れ、予は決して楠公の死を悲むものにあらず只悲む所は、公の國家不運の時に際し、燃ゆるが如き忠君愛國の心を伸す能はず、齎勃たる恨を含んで、空しく四條畷の露と消ゆざる可からざるに至りし其の心事を悲むにあり、

嗚呼諸君よ、終りに臨んで諸君に望む、諸君は有爲の青年なり、國家の中堅と成る可き原素なり、宜しく刻苦精勵他日の大成を斯せよ、濫りに職を辞し、責任を遁るゝが如きことある可からず、自殺は不可なり、隱遁は卑屈なり、男子一旦志を定め、國家に盡さんと欲せば、徹頭徹尾、壽を賭して之れに從へ、之れ此の老耄が諸予に對する唯一の願なりと云々、

◎增田先生を迎ふ　天然の美妙も一皿の繪の具になり、自然の眞相よく一枝の筆にものせらる、嗚呼繪畫の妙甚だ奇ならずや、理を推せば日光の光線は斜になり、縱に映じ、正方形は矩形と變じ、圓は楕圓ともなり、地平面上に建つ一棟の此校舍も、よく其地下に入りて、地底より視る校舍の形狀の如何を寫すことを得るぞ、これよく人工よりて數千日の間になし得べき容易のものなるが、一脚のコンパスと分度器は僅に數十分の間、此困難にして、複雜なる事業をなし遂げしめ得るぞ、豈又奇ならずや今や我校曩きに今永先生に別れしより、今日斯道の專門なる增田先生を迎ふるを得たり、先生夙に斯道の熱心一方ならず、此地もと美景に富めるを以て、之を奇貨とし、晨に夕に繪具を手よして、之を寫し以て模範を吾人に示さる、悅ばしい哉、我校斯道の發達を期して待つべし（五月十四日）

◎寄宿舍春季遠足　萬野の綠漸濃く、籬間の鶯鳥去りて、雲雀高く空に飛び、恰ら春の愉快を吾人青年に歌へるが如し、青年たる者豈一室に齷齪す可けんや、此に青木先生小出先生杉浦先生舍監五先生舍生百餘名相謀り、八幡近郊に遠足を試む、時に五月十四日、

始め道を順禮街道に取りし、間もなく朝鮮人街道よ出で、日夏能登川等の村々を過ぎ、午前十一時三十分頃漸く安土山に達しぬ、山たるさまで高くも又嶮岨にもあらねど、前には京都よ出づる咽喉を扼し、後には琵琶の湖水に臨み、實に當時要塞の地たりしこと明なり、羊腸たる樵路を辿づること二三町許りにして其處に信長の墓あり、彊域方數間許り、周圍には土塀を廻らし中央には石を疊み其の上に一頑石を据へたるのみなれども、邊りの景色物古りて、古英雄の面影も偲ばるゝばかりなり、舍生は暫時休憩の後、西方より山を降りて豊浦村にと着きぬ、此處より予等は舟よ乘じ直ちよ長命寺に到る計畫なりしが、舟の都合惡かりし爲め、止むを得ず、中食の後八幡に向て出發しぬ、

かくて八幡に到り、八幡尋常高等小學校内に於て一休憩の後、舟四艘を雇ふて長命寺に到りぬ、寺は山上にありて眺望絶佳、堂塔は古色蒼蒼として、如何に往昔佛敎の盛なりしかを知るに足る、折りしも夕陽西山に臼き、晩鐘遠く湖上に渡りて聞ゑしかば、急ぎ八幡に歸り、八時發列車にて歸舍しぬ、

◎岡田前實業學務局長演說　氏は長く實業視察の爲め、歐州各國を巡視せられしが、此度來彥の途次、本校に立ち寄り一場の演說をせられたり、其の大畧左の如し

余が歐州漫遊中、見聞せし所本より多しと雖も、就中英國の敎育事業の如きは、實に盛中の盛事と云ふ可し、英國の强盛なることは、世人の善く知る所にして、此に贅するを要せずと雖も、彼の南亞事件ゑ於て、許多の歲月を費金とを要するにも關らず、其の本國は依然として更に戰爭を知らざるが如きは他邦には見る能はざる所にして、其他平時の輸出入額、市街の繁華、領土の廣大、國語の普及の如きに至りても、恐らく此の邦に及ぶ國はあらざるべし、

以上述ぶる所は、單ゑ物質的進步の狀態なるが、更に其内部に分け入り、道義的進步ゑ至りては又同じく無比と云ふ可きか、今其の一二の例證を擧げんに彼の國人にして、若し不正の者あれば、忽ち社會ゑり輕蔑擯斥せられ、孤獨の有樣ゑ立ち至るなり、今其一例を擧けんに或る日本の煙草嗜きの一紳士、多量の煙草を所持して此の國ゑ遊びしが、此の國の規則として、煙草の量多きに過ぐる時は、必ず其の海關稅を拂はざる可からず、然るに紳士は不正にも、工合よく此れを隱し、關吏を欺きて其の場を免れたり、かくて後、一知己を訪問し其の家族と共に晩餐の饗を受けし時、彼れは得々として、其の始終を語り、一坐の者をして、己れが頓智に驚かしめんと思ひしに、意外にも一坐の人々怪訝な顏して互に顏を見合せしにぞ、紳士始めて其非を悟り、大ゑ愧ぢたりといふ、思ふに、我國に於ては、此の種の行爲をば却て稱讃するの弊風あるを、直ちに英國にても然らんと、淺くも考へしより、かゝる事の起りしならん、此れ本より一鎖事なりと雖も、彼の國民の如何に不正不義を厭忌するかを知るに足る可し、故に彼の國にありては、如何に土地不案内の旅人と雖も、更に不正の金錢を欺き取られ、不義の暴擧に遭遇するの憂なく、安堵して旅行し得るなり、此の如く、此の國の人民は、行爲の上に於て正直なるのみならず、其の業務に就き規律整然なること、他ゑ其比を見ざる程なり、實に彼等が業務に從事せる時は、一心不亂、敢て雜談又は謠歌することなく、靜肅ゑ、實看に働くを以て、肩摩轂擊の市街と雖も、只車輪馬蹄の響を聞くのみ、又混雜中遇々馬車等の衝突を來すことあるも、決して一言の罵詈なに交ゑず、互に已れの過なりと思ふものゝ如し、以是之れを見れば、英人の性質たる甚だ眞面目にして、動せざること山の如く、且つ堅忍不拔の志、進取不退の氣象に富めるものと云ふへし、佛國の如きも、世に强盛國として知らるゝ程の國なれば、容易ゑ悔る可からず、と雖も、其國民の性質は英に反し、好奇心盛んにして、何事も此れを永續するの能力なきを以て、亞米利加に於ける領土の如きも、漸々英領に歸し、現今にては、カナダ印度等皆悉く英の所領となるに至れり、殊に驚く可きは、獨逸人の亞米利加合衆國に移住するものゝことなり、彼等は、始めの程こそ、愛國の念も盛なれ、年月を經るに從ひ、漸々國を思ふの熱は冷却し、遂には全々英化せられ、殆ど自國を忘るゝに至る、思ふに之れ全く、英人の確固不拔なる精神に吸收せられしゑ因るならんか、

如是英人は精神の秀逸なるのみならず、身体の肥大强健なる点に於ても他邦に其の類なきことは明なる事實なり、然れば、英人は何故に總ての点に於て、萬國に其比類無きやとは、之れ將に吾人が腦中に湧出づる問題なり、余の考ふる所にては、英人は白色人種の内チュートン種に屬するものなれば、人種の点に於ては、他の歐州各國と差したる違ひなけれと、其の萬國ゑ冠たる所以は全く、其國敎育の他邦に異

なるゝあり、

先づ此の國の教育の中心とも云ふ可き「オックリスホード」及び「イートン」等に於ける校風を見るに、科學の如きは寧ろ此れを第二の目的となし、品性陶冶を以て教育の大眼目となせるものゝ如し、故ゝ教場に於ける科學教授の法ゝ至りては、各國とさしたる差違あるを見ざれども、其倫理修身とも稱す可きものに至りては、大に其の教授法を異にせり、中學或は大學豫備の學校に於ては、毎週土曜日シャーペルの儀式を開き、生徒一同を禮拜場に會し、或は深妙なる音樂を奏し、或は高尚なる讃美歌を合唱して、いと森嚴に靜蕭に敬神の意を表するなり、而して此の儀式は最も重大なるものにして、他の學科ゝ於ては欠席を許すも、此の儀式に於て濫りゝ欠席する時は、遂に試驗をも受くるを許さゞるに至るといふ、實に神聖なる儀式と云ふべし、

又体育の法に至りても、實に隆盛なるものゝして、敢て壓制的に行はしむるゝはあらざれども、各倶樂部を設け、フートボール、ブラッケット、或は游泳術等を練習せり、之れ大學以下中學以上の教育の概略なりと雖も、大學も之れと大同小異ゝして只其目立つものは、大學以下の諸學校に比して贅澤なると、シャーペル會無くして此れに更ふるに毎日晩餐の時に臨み全生徒一堂ゝ會すると等なり、於此等の外ゝ感ず可き所は、其學校の歴史を重ずることにして、例へば此の教室は、ボストンの嘗て勉强せし室なりとか、或は誰々が用ひし器具なりとか云ひて、總て其校出身者にして、社會に貢献する所あるものは、其の肖像及び姓名を其の教室に掲げ、以て後進者を激勵するの具となせり、嗚呼高等教育を受くるものにして如是有樣なれば、上の成す所下此れに摸ふの古諸の如く一國擧りて正義を尊び不義を嫌ふに至りしも亦故ある哉、

夫れ智德両育をして完備せしむるは古來難しとなす所なり、英國も精神教育に於ては、萬國善く此れに比倫する國なしと雖も、其の科學進歩の点に於ては

獨逸に比すれば稍劣れるの觀あり、而して世が進歩するゝ伴ひ、精神教育の外に智育の必要なるは益其度も嵩むるものなれば、英國の識者の中に於ては、早くも此ゝ見る所ありて、目今大に大中學改良の議論起れり、其智德完備の域に至らんこと益し遠きにあらざるならん

終りに臨んで、我國の教育に於て望む所は、人物養成法は之れを英に取り、智識修養は之れを獨ゝ取り以て智德両全の國民を養成するにありとす

◎演說討論大會

六月八日我崇廣會演說討論大會を講堂ゝ於て開會す、佐藤部長、先つ登壇して開會の辭を述べらる、副會長廣田先生次で登壇し、本會員に對するの希望を述べらる、要に曰く、余過去に就て見るに、諸子の登壇演說するに當り、往々にして、手足を動がし以て得たりとするものあるか如し、此れ、余の大に取らざる所にして、將來は、本會の眞主義を念頭に持し、以て、之が貫徹を期せと次て、指呼に應して登壇するの辨士は、

○第一席　心身を練れ　第五年級　中澤尙次郎

言語朗々、天下の大勢を論じ、來りて曰く、今や、生存競爭は、益々盛に、優勝劣敗、々甚し、故に優なるものは、愈愈々優に、劣なるもの益々劣、故に、優者たらんとするものは、須く、心を磨き、體を練らざる可からず。云はずや、健康なる身体に、健全なる精神宿ると、諸子、其れ、勉めよやと。

○第二席　成業の心得　第一年級　脇利左衛門

成業の心得は、健康と、已の目的とする所に、直進するにやり、諸君、此の所に意を用ひ、勇往直進、天晴れ、業を遂げ、以て、天下有爲の人たれと。

○第三席　開平開立に付て　川口先生

開平開立に付て說かるゝ所あり、趣味津々、時に、諧謔を交へ、人の頤を解く、余輩は難解の開平開立を、最も、容易に說示せられしを、謝するものなり

○第四席　義務　第五年級　堤直一

義務を知らざるものは人に非ず、苟も、人たるものは、義務の何たるを知らずして可ならんや、然り、然して、吾等會員は、本會に對する義務を解せざる可からず、然るに何ぞや、往々にして、知らざるものあり、否な知らざるに非ずして行はざるなり、豈に、慨しからずや、諸君、須らく岡田文部官房長の談に付て考へよ、と、痛快の辨を振へり。

○第五席　理屈　第四年級　賀來俊一

廣き三千世界にて、最も惡む可きは、小理屈云ひなり、我々、中等教育を受くるものは、緻密なる、腦髓を有せざる可からず、然りと雖とも、小理屈は云ふ可きにあらず、吾等口を開かんとすれば、正々堂々とてし、一の疾しき、所なきを旨とせざる可からず、彼の、三百代言なるものありて、小理屈を、以て、業とせ、其の面や憎む可し、故に諸君は常に、公明正大と云ふ、精神を有せられんことを希ふと。

○第六席　杉浦先生

登壇悠然として口を開きて云へらく、吾々はそも何ぞや、曰く書生たり、而して政界に雄飛する元老は如何、彼等も亦破帽短褐の書生たりしに非ずや、然れば則書生の任務知るべき而已、而して今の書生は古の所謂士なるものにして國家の中堅なり、故に常に困苦欠乏に堪へざるべからず、孟子の所謂「生於憂患而死於安樂」とはそれ之を謂ふ、今こゝに此江河に因緣深き熊澤蕃山先生を引証せんとす、蕃山先生は德川初代の人にして京に生る、父を野尻一利といふ、幼より叔母に育てられ、十有六歳にして備前岡山侯に仕ふ、以來專心身を武術に委ねしか又文學に志し仕を辞し岡山を去て京師に入り其より我藤樹先生の門をとひて敎を乞ふ、先生拒絶すること再三蕃山檐下に坐すること二晝夜、遂に許されて敎をうけぬ、已にして齡廿七、業成り再び歸藩し要職にたちて其貢献する所偉大なりき。

先生の志氣の堅固なること此の如し、然り而して成功を以て終局をつげぬ、以て余等の師表となすべしと。

○第七席　學生と書籍との關係　第四年級　宇治原孝三

冒頭學生と書籍との關係をとき、最後に精神を込め讀書せざるべからずと結ぶ語句簡明、

○第八席　貧富　第五年級　赤松鑑

富貴はそれ何人と雖とも辞せず、而して世に貧富の分たるゝ所以のものは他なし、天才の賢愚、天運の如何に歸するものなり、然りと雖とも貧者決して侮るに足らず、夫れ富者は概して身体軟弱にして貧者は日夜勞動にたへ精心体格何れも强硬なり、戰爭の加く力役を以て決するもの身体軟弱にしていかんせん、實に貧者は社會組立の主要なるものなり、

○第九席　眞の勇氣　第四年級　柴田善作

眞の勇氣とは常に靜止し、一旦事あらば奮然起つをいふ、日清の戰勝實に之に歸するものなり、故に諸氏常に心膽を練り、一旦緩急あらば宜しく其勇をふるふべきなり。

○第十席　社會的の道德　奥田先生

當今社會的道德の衰頽につきて卑近なる二三の例を以て說明せん、

諸子眼を四周の建築物に注げ、或は樂書、或は惡戲の根跡至る所に見るべし、一町一村の風紀を知らんと欲せば敢て高尙なる事物に依るを要せず、僅に此一点を以て能く其社會的道德の如何を知悉するに足らん、進で學校其他公共の建物に至りては余は反比例的に其多きを認む、倫理なるものは單に理屈一片にあらずして實行にあり、然らば諸子も卑近なる点に着目留意せんことを望む、又停車場に行くに發車前となるや、老弱婦女を排して其先を競ふを見る、一人の彼の謙遜美德を表すものなし、抑謙遜の美德は徒に叩頭百拜するに止まらず、宜しく如上の範圍まで押し廣むるの必用あるべしと信ず、此に於て余は諸子に望まむとするは此社會的道德衰頽の恢復に在り、されど余は大仕掛に諸子自ら其改良の大任に當れといふにあらず、或人も曰く社會國家の改革を呼號する人は誠に愚の至りなり、唯自己の責任を全ふすべしと、是れ實に適切といふべし、それにつき余の諸子に嘱望するものは唯自己の信ずる所を行ふべし、四周の境遇は如何なるも他人の行爲は如何なるも、自ら以て善と信ずれば撓まず遂行すべし、青年は兎角「イミテーション」の强きものなれば若し惡しき「イミテーション」より來る動念が襲來せば茲に平素鍛練の道德心を以て之を排し益々一身一個が不道德的に出でざる事をのみ期せられんを望む。

○論戰　午後四時三十分、聲高く聞こゆる鈴の音に再び集まれる四百有餘の會員、張儀を走らしモルトケも三舍を避けしめんとの面かまへ、實に實に勇ましなんど言ふばかりなく、絞りに絞りし腦漿、練ひに練ひし能辨、今日こそ見事に舌戰を試みんと、勇みに勇むめれ、高く揭けられたる、賽士と沃士と何れが人智發達すべきか、てふ討論題に注目して、滿場寂然たり、

忽ち壇上高く拍手に迎へられて、佐藤部長顯はれ出でぬ、開口一番徐ろに說いて言はく、本日の討論演說會の盛なる、出演者總數の半を終へざるに、已に既に討論會よ移らざるべからざるの止むを得ざるに至る、亦近來の快事ならずや、然れども時間の不足の爲めに、高論卓說を聞く能はざりしは吾人の至憾とする所なり、されば次會に於て是等の高論を聞かん、乞ふ出演者諸君、それこれを諒とせよ、却說本日の論題はこゝに掲示したるが如く、瘠土と沃土と何れが人智發達すべきかなり、諸子懸河の辯を奮つて大よ之を論せよ」と舌戰の宣告は下れり、開戰の機は迫れり、誰か、勢を一擊の下に立つ能はざるに至らしめんとするものぞ！

議長ッ！野村義雄ッ！

名乘り出ですたるぞ、屈强の若武者、

沃土々々、吾人は沃土に賛するものなりと、滔々其理由を說き、縷々其事例を擧げて論じ來る得意の快辯にさすが瘠土の軍もたまりかね、周章狼狽すると思ひきや、瘠土の勢に其人ありと知られたる今村文碩君、すつくと立ち上り、「さても〳〵奇しき事を聞くもの哉」と一刀擊ち込み、敵の鋭鋒を折き置きて、一調聲高く、「乞ふ見よ今日の印度の有樣を、土地沃なたり、人智早く開發せりと雖とも、獨立の體面何處にかある、彼等は遠く西歐赤髯碧眼の輩に腰を屈し、自ら社會以外に放逐されて以て足れりとせるにあらずや、是を以て眞に人智發達せりとなすか彼等が古の發達はこれ皮想的のみ、何ぞ眞の發達と言ふべけんやと呵々一笑、あはれ沃土軍無二無三に切り立てられたり、第一回の突擊もろくも沃土の敗とならんとするを、藪田勘兵衛君數學的に論じして曰はく、總て人の事業をなさんと欲せば、必ずや幾多の時日を要す、而して一時に二箇の事業を成功し得べからざるは、猶夫の二物體が同時に兩所を占むる能はざるが如し、然らばもしそれこゝに人あり、衣食裕ならば即ち他の諸般の事業を案じ得べく、之に反する時は衣食に追はれて終歲孜々營々之を得んが爲めに東奔西馳、終に何事も成すこと能はざるの理なり、而かもその豊なるは沃土よあるは言ふ待たず、因是之を觀れば沃土は諸種の人智を發達せしむるや必せり、況んや其蹟歷々、史上に於て照々疑ふべからざるに於ておや、

突如として現はれ出でたる岩田君、眼鏡越しに敵勢をじろ〳〵眺めつゝ悠然舌もて唇を霑ほしつゝ、野村君の說やよし、藪田君の論や可なり、然りと雖も吾人は兄等に服する能はず、試に西史を繙け、兄等はフイニシャが史上に遺せる幾多の功績を見るならん、而して其土の荒瘠一垂の穗をだに得る能はざりしをも知るならん、而も人智發達して以て今日の世界文明の基因を致せる何ぞや、これ瘠土なりしによれるなり、フイニシャ人は實に是が爲めに奮起したり、余は信ず、瘠土よく人智を發達せしむと、兄等何の言かある、と眞甲より打てかゝれば、佐野善次郎君丁々發矢と受け流し、埃及の古代を引證し來つて大に之を駁し、更よ說いて曰はく、斯の如くよして埃及の古代文明はなれり、斯くの如くよして埃及は世界文明の曙光を放てるなり是れ一に埃及が豊富なりしよよるなり、然らば則ち沃土は人智發達に至大の恩惠あるものたるや言を俟たず、之を聞くや否や、今村君再び立つてフイニシャの埃及に優ることを論じ、之が鋭鋒を挫きたり、忽ち藪田君叫んで曰はく、咄々何等の痴言ぞ、それ世界文明を希臘、羅馬、フイニシャより發し、これらは皆西方亞細亞より輸入され、西方亞細亞は源を遠く埃及に發せるなり、且フイニシャは直接或は間接に其基源を埃及にとれるなり、咄々何等の痴言ぞと述べ終りて悠々と席に復しぬ、柴田善作君立ちて曰はく、人智の發達は經驗より來り、經驗は最も多く艱難より生み出さるゝなり、然り而して瘠土は生活上甚だしき艱難を極むるが故に、その地の人は自ら經驗に富み、從つて智識の發達の著るしきに至るを論ず、中澤君立ちて曰はく、文明は人の集合地に起る、而して人は沃土に集合するものなりと說く、岩田君之を駁して、

英、獨を擧げて反證し、廣瀬淵龍君更に之を補述し安藤、福島、飯村の諸君交々立ちて論談す、舌戰今や酣にして論議紛々甲論乙駁、殆んど底止するところを知らず、この時堤君、慨然として立ち、奇とや曰はん怪とや申さん兄等は徒らに机上の定論を鳴らしつゝあるなり、乞ふ余をして之を實際的に論せしめよ、俚言に云はずや滿つれば缺くる、或は長者三代續かずと、是れ皆豊富を意に狹めばなり、怠惰の念を生ずればなり、されば事實上、肥土豊沃の地よりて勤勉せんは難し、蓋し人の安逸を貪るは人類の一大弱点にして、かの貧者より人物の輩出するも此理に外ならず、何ぞ金釘的の論を要せんやと、藪田君之を一言の下に退けんとす、偶々坐隅に控へたる岩崎健三君、得意の辨を揮つて曰はく、余は瘠土に賛するものなり、かの瘠土の人民は沃土の人民よりも比較的思考力に富めり、何となれば総て人は不足あれば之を補はんが爲めに工夫を凝らすものなり、然るに瘠土の人民は衣食住に不足を告ぐるを以て之を補はんがために千思万考す、之よ反して沃土の人民は衣食共よ天然の恩惠に浴するにより、生活上不足なきが故に比較的工夫力に乏しきは吾人の言を俟たず、と是より論戰益烈しく、新に清水省三氏、滔々瘠土論を主張し、今村養達君獨得の辯を振ふて鎬を削り、流暢の辨、輕快の舌、言一言、語一語、快絶壯絶人をして腕鳴り、肉躍るの感あらしむ、時已に黄昏漸く人の眉目を辨せざるに至る、此に於て部長は終結を告げ、勝敗を多數に問ふ、遂に沃土の勝となりぬ、勝者の得意！嗚呼！想ふべきなり、次で廣田副會長、之を講評していはく、辨に能辯、雄辨の別あり、人心をして感動せしむるを雄辯といひ、滔々懸河の如きを能辯といふ、惜むらくは本日の演說討論會に於て、雄辨の人少なかりき、乞ふ諸子勵奮一番以て次會に雄辨家たらんことを期せよと、已にして君が代を三唱して散開す、時に午後六時なりき。

◎對同志社野球仕合

多年の連戰、常に勝を敵に制せられ、未だ以て目醒ましき勝を見るを得ざりし我校撰手は、又何の日か〳〵と、焦熱地獄の夏の日も、井戸の水さへ凍ゐ上りたる、冬の日も、會稽の耻は此手と此腕。化しては雪魂となり、復しては ボールとなり、バット一振にあらゆる精神を込め上げたる折しもあれ、威風凛々關西になり渡り、勇名嘖々台灣の端まで響かぬはなき、名にし負ふ京の都の、同志社は書を飛ばして我に野球仕合を申込みぬ、

折角鍛ゐ上げたは、かういふ時、いかでか辭せん〳〵來る六月廿五日を約して承諾しぬ、よし戰は勝つとも負くるとも、我手並の程を見參に入るゝは、日頃の樂み敵勝たば勝て、我れの敗るゝのみ、如何んぞ區々たる勝敗を爭はん、アレ御參なれ〳〵。

同志社撰手も亦男！彼は『男らしく』といへり、快なる哉、壯なる哉、

日は來りぬ、戰は來りぬ、快戰は午後一時を卜して開始せられぬ、先づ遠來の客我塲裡に練習を始む、克く握り、克く打ち、御手並の程、流石は天晴れ〳〵好敵手！

挨拶の禮は相互に了り、赤帽先づ攻め、白帽先づ守る白帽は白軍にして、即ち同志社の大撰手にこそ、徐ろに出でゝ其壘を守る、觀る者堆上、無慮五百、肅々として、全野聲なく、忽ち喨々たる一聲。

——プレイボール——ア、今や戰は始まりぬ、白や如何に、如何ぞや紅軍。……

第一戰

硬骨、スラリッとしたる黑漢、横柄に全野を睥んで先づ顯はれしものは我將草川靜次郎氏なり、見渡す敵壘、点一点の隙なく、悠々たるピッチの態度、暢々たる、キャッチの身ぶり、腰付き、一球かりそめに投せず、長軀の黑漢先ヅ二球を捨つ、——忽ち憂然として塲内にひゞき渡ると思へば第三球はビューッと激烈なるゴロは一瞬LFの邊に走る、草川1Bを超ゑて、2Bを犯す、次いて立つものは、大橋孝五郎氏なり、バットの先さに一寸の隙なく先づ全野を見渡

し、目に物見せんと振上げたり、第二球――球はSSの頭上を掠めて飛び早脚韋駄天然として2Bを取る已に草川ホームに入る、敵手稍狼狽の氣味あり

次いで村上善正氏これ見よ拙者も……といふスタイルバット一撃、珠は高く飛び上がり、身はいつかIBを占領するや、大橋終にホームに入る、次いで立つものは、名にし負ふ長が男、桿竹の如き一漢、他なしこれ第三壘の將軍山本小五郎氏なり、見渡す眼は虎の如く、勢鋭き味方の軍兵、あはやと思ふ時こそあれ、猛球ピューッと尻の端を掠め、デッドボールの聲諸共に、難なく一馳IBを我物にしたり、かくて之に次ぎしは前とは變つた小さな身振り、バットの振り樣、腰の立て樣、一寸見てさへ機敏なるスタイル、云はずとも其藤林信敎氏なるを知りぬ、身は小さくともボールは我身の數百倍も何のその、飛ばして見せるが、コラどうだといふ一刹那、ヒューッと空を掠めて、一打ちのフライボール、敵はよく之を握り得ずして難なく、IBは藤林の手の中に、村上直にIIBを取りぬ、次いで壘上の屈强漢田邊隆吉氏、バット悠々翳し上げ、赤の帽子を斜にひッかぶり、ユラリと立つたる姿は、どッちから見ても好箇の撰手、一球、二球、空を掠むるピューッの音諸共に、打上げしボールは哀れやIIB守將の爲に捕へられ、果敢なくも戰場の露と消ねぬ、之に次ぎしは高橋茂十郎氏バット手輕にサア來いといはぬばかりの勢敢なくもこれ又一撃のゴロは、ライトの爲に援とられぬ已にして山本ホームに入り、藤林IIBを占領しぬ、かくする程に、可笑しや豚大の大男、ノソリ〳〵と歩むスタイルは角力土俵入りの、それの如く、やう〳〵ホーム、ベース上につけば、眞黑の面に大きな口元、コレデ、ベースが出來るかと思はるばかりの豚大漢、これなん白井恒治郎氏なることを知りぬ、バット手にせしかと覺しく、滿身の大力で、振り回はすよと見るまに、飛び上がるボールにヤルとIBを乘取りしが、次いで千葉綠氏目鼻の別らぬ黑男、此時已に藤林はIIIBに、白井もIIBを占めしが、モー一ベースといらだつ藤林の心中も、情けなくも千葉がSSの爲に殺さりしより、両士は空しくスタンヂングの悲命に接しぬ、

代つて守る我軍勢、代つて攻むる敵軍の兵、我壘固し一人の攻取をも、なでふ空しく致し候べきといふ權幕おそろしく、各々守備を嚴にして、今やおそしと白軍を待ち設けぬ、プレイボールの聲諸共、ノッコリとHB上に現はれし大將は北脇作次郎氏其人なり深嚴なる白井の風采、容度、攻手又一点の油斷なきも、身を絞つたる勁球徐發、如何んぞ之に敵するを得ん、空しく三度振りの立往生を遂げぬ、

之よ代つて、白軍の猛將進藤尙之助氏、意氣凛々事なくIIBを突きしも、此時おそし、我Cの飛球や迅し終よ又IIB途上よ討死したりぬ、實に見事なるは我IIB守將、田邊の手際にぞある、次いで勇將前神堤氏、これも我Pの勁球にや敵し難かりけん、空しくサブドストライキアウトの聲に悵然たり、此一戰我得点4、白軍0なり、

第二戰

我攻守共よ巧みなるに舌捲きたる白軍は、オノレ見よ此一戰ぞと、いよ〳〵守を嚴にして、先づ我將草川の高球も、花々しく手並立派に、RFの手に取られ次いで大橋のフライも亦、IIIBのミットの内に悠に捕はれぬ、村上又1Pの悲運に際し、憐れやノーバス敵勢稍振ひ初めぬ、我又何でふ、これに屈すべき、我技何でふ劣るべき、此仇がへしは此一戰と、見る者は手に汗を握り、守る軍卒氣天を衝く、

打つて出でしは、勁將富永欣吾氏、猛撃突進事なくIBを領せられたる我軍の氣や如何に、次いで田中健三氏がフライ一舞、我LFの爲にコレ見よがしに捕はれ、代つて畑歡三氏が大々的大攻撃にIBを乘取られ鋭將廣田林四郎氏が飛球は我IIBの功名に期し、驍將矢野敬爾氏が高球も亦我IIIBの爲よ、捕はれしが、富永氏の疾脚、意氣豪然ホームを我物とし、流石の意氣込、白軍得点1、

紅白劣らぬ、攻め振り、守り振り、中々見事よ、見

事よ、見事！

第三戰

唯々一面の陣地、敵壘まず〳〵堅ふして、容易拔くべくも非ず、山本のフライ、藤林の飛球皆其効を奏せず、終に田邊の猛擊も其甲斐なく、果敢なくも我軍一点を收むる能はず、

代つて守る我壘の隙を覗ふ、白軍の將佐藤勘助氏が手振り足振り、サテハ眼付きのすさまじく、飛び込まんずる勢も我壘如何んぞ、彼が蹂躙ふ任せんや、佐藤は三度振り、例の北脇、又三度振り、北脇が慘死のすさまじさにムッとしたる進藤氏、辛うじてIBを襲ひ、前神氏又突進し、富永氏勢に乘じて、奮然猛然、來ては見たものゝ、石火一閃白井の働き、いかで此堅壘を蹂躙せしめんや、白軍終にノーバス、

第四戰

サアこうなつては獅子奮進の勢ひ、高橋先づ突き、白井見事に襲ひ、千葉のフライはSSの爲に獲られしも、敢て屈せぬ草川の奮進、大橋が三度振りの悲命

にも拘はらぬ村上の意氣、ボール天に舞上り、山本難なくIBを侵せしが、此時已に前者ホームを乘取るもの三、次いで藤林、Bの×の無念やる瀨もなき恨の最期ふ、我軍獲るもの三点のみ、

舞ひ戻つたる我勢、天晴れ見事なる攻突の仕振ふ、憤然たる白軍の意氣、田中氏先づIBを占め、畑氏がフライ天に舞上りしも、我IFが恐ろしき手並の程に功を空しくし、廣田氏の將軍又徐に進擊せしも、矢野氏は又もや、我熱球の爲に弄せられて立往生の果敢なき命數、次いで佐藤氏、漸くIBを襲ひたりしも之に續きし北脇氏が勁球、我SSの目醒ましき雷光の早業に、終に壘上の露と消ゆて得る所は只一点、

第五戰

無理に形容すれば怒濤の寄せくる勢とでも申さふか天下を蹂躙す七寸の草鞋のそれにはあらねど、紺足袋の此裏で、此壘砦を蹂つてくれるぞといはぬばかり、サッテもすさまじかりける次第なり、

先づあらはれし田邊の御大將、奮突IBに襲入し、高橋の一打、難なく又もIBふ入り、哀れや白井はIBに無慘の死を遂げ、千葉又入りしも兎角に逸る血氣の武者振り、拙なき運命、IIBに憤死しぬ、此時已に田邊はホームに入りしが、草川のフライは、又もや、はゐ〳〵しきRFのお手際に、我軍僅ふ1といふ得点代つて白軍、進藤氏は白井が件の手並に殪され、前神氏、富永氏、田中氏、の面々揃ひも揃ふてIBに進入する有樣なるに、サテは逆しまふ、足袋の裏で蹈みにぢらるゝかと、豈默視する忍ふべき、次いで畑氏をIPに斃し、廣田氏のフライはSSのお手の内ふ難なく、捕はれ、白軍是に於て、トータルに1の字を記入せられぬ、

第六戰

先づ立ちし大橋のゴロはIIIBの爲にやッつけられ、彼が疾脚も何の甲斐なく、村上先づIBに突進し、山本次いで又入り、藤林フライ一打、Pふ參らされ、田邊又冒進し、高橋又もやIBに乘込み堂ッとお尻を上ろせしも、白井がFSSの爲にスタンヂングの悲運に陷りしも、かの時迅やし、村上已にホームを占領せしが爲に、我得点1、

偖又代り舞臺は我軍の壘、先づ矢野氏の剛將は、我SSの早業に殺され、佐藤氏の一擊、3Bの爲にしてやられ、北脇氏、猛球ビューッと、1Bを我物とし、進藤氏事なく、侵入したりしも、富永氏がXTの拙なき命數、定しく壘下の鬼となりしが、北脇氏容易ふホームを手に入れたり、得る所一点、

第七戰

壘上バットを振上げたる千葉の荒武者、憂然たる一打のゴロは、又も3Bに捕はれて、憤突IBに死し、次ひで草川のフライも空しく、LFが一塲が擧れに名殘を留め、之に續く大橋の任や大、一睨一擊、事なくIBに侵入し、村上又IBを占め、山本之に次いでバット振上げたり、見渡す全野、大橋已に3Bに、村上又IIBを伺ふ一刹那、大橋機を看てホームに進みしが山本のフライ、LFのミチトにドッと音して、フライアウトの聲諸共、代つて守る我陣壘に、意氣俄

よ熾んなる敵勢は、エンヤ〳〵と攻め寄せたり、殘すところは、僅に二回、見よ此一戰に前敗を償んする心底、バットの先にあり〳〵ときわだち、我軍亦嚴、田中氏先づ打つてIBを侵す、次いで畑氏のフライは、IF我の爲に得られて、悵然アウトの聲に退ぞき、廣田氏侵し、矢野氏進む、一ベース、二ベース……三ベース、……ホームベース何のその唯々一對の足跡に肝を潰しやらんず權幕、オサ〳〵當るべからず、我又何ぞ屈せん、今しも2Bに突入せんとする、田中氏も屈强なる我2Bの手ぎわ見ん事慘殺せしも、畑氏の攻擊甚だよろしく、終にホームを襲取せしめしが、終に佐藤氏の飛我球は、SSのお手の中に花々しくもIB上に討死の最期

白軍僅に一点、後はいよ〳〵我攻擊となりぬ、

第八戰

得る所は、毎回〳〵いつも〳〵、一点より多からぬ情けなさ、花々しく物の見事に我伎倆の程に喫驚仰天せしめんとの我軍のけはひ、「ソレ慌はてるな」「急げとは自分と自分の心を戒める文句、先づ打つて藤林がIBを乘取れば、我も〳〵と田邊も亦IBを突破りしか、高橋が攻擊其効なく、獨り壘上討死の始末、守備よき砦も、藤林、田邊の爲ににじられて、ソレ2ベース、ソレ3ベースと、突擊猛進、さて又白井は哀れ果敢なきFIIの最期に、ナニッ此かたきは今に視よと、千葉の一擊その効ありて、ソレ今だといはぬ許りに、一方IBを突けば、一方はホーム目掛けて必死の勢、コレ見よござんなれと草川の熱球、ヤアといふ間に、白軍慌てる、ボールは、はづれる、壘は破れる、勝に乘入る大橋の勢、これも事なくIBを衝破りしが、村上がフライ、風よゆらるゝ木の葉の如きも、ボーンと響くミットの音に、ボールはRFの爲に獲られ、哀れや立往生の姿、我軍得る所二点のみ、今や其軍狂亂怒濤の勢、此無念は此一振りと、必死を込めたる北脇氏の攻擊其効なIPくの悲命を被りぬ次いでCF難なくIBを抜きしが、2Bのフライ眼も狂はんばかり、なりしも、又これの爲に攫み取られ、富永氏のすさまじき勢力も、如何せん、運か、天か、はた命か、終よIBに討死して白軍得る所なし、

第九戰

いよ〳〵九回、打つて出るも、これで最終、少しの勝よ油斷すな、ソレ〳〵といふまに、一令レヂーッの聲に、敵陣目掛けて斬込む大兵、六角の胸章あり〳〵と、山本は難なくIBを拔取りしが、之に次いで小さな武者振り、藤林輕快なる足元、わざと落付き拂らッて打つ球諸共IBを乘取り、之に次いで田邊の太い男ドシ〳〵打込む味方の切先するどく、天を衝いて上がるフライ、地を飛んで行く鋭きゴロ、白井のフライ効なく、千葉勢に乘じて突入りしも、2Bにて目ざましき戰死を遂げ、續いて突入る草川、摩利支天の狂ひ回るが如く、熱球高く舞ふては燕雀の空を翔けるよ似たり、大橋の勢、夜叉の如く、村上の刃鋭くして敵克く當り難く、あはや全野、見渡す一面は、見る〳〵大修羅場と化し、血雨漲り、屍丘堆かゝらんとする有樣なるよ、こゝにバッターは又も一廻り、始めに戻りて山本の大將、攻突事なくIBを破りしが、隙のみ伺ふ紅軍のランナー、壘のみ、ねらふ味方の眼、一壘已よ陷つては、二壘もはや危く、守將の奮戰、步卒の憤鬪、抑々これ、電光か、石火か、左へ走れば、右へ廻り、一を襲へば、二は備へ、左往右行のピッチの態度、ランナー走れば、ボール飛び、ピッチ投られば、ボール舞ひ、奮激突爭、全壘悉く陷りしが、かゝりし程に紅軍の鋭將藤林が突擊、猛烈なるボールは、天晴れ〳〵、賞むるよ詞なきRFの手際に、IBに奮死せしかば、即ち軍を引上げゝる、この得点五点、

代つて守る紅に結甲の三ッ紋撰手、代つて攻むる白帽の同志社軍、例令戰は敗を取るとも、我技倆の程を見せて、呉れんず白軍の意氣、豪なり、壯なり、快なり、活なり、先づ攻むるものは、白軍の田中氏にして、見事に打つて攻寄せしが、氣いらだち、壘又恣に乘取り難し、終に途上に迷ふて、果敢なくもXの最期、次いで畑氏、我こそはと名乘り出でん身の

搆へ、又死戰狂鬪、1Bは死し、次いで廣田氏、氣は疾れども、堅壘鋭刃、如何せんこれ亦1Bに慘死して白軍Oなり、嗚呼、天か命か、はた又我伎の彼れ以上に、ありしを以ての故か、即17:5の差を以て我軍の勝となり、戰は茲に終止せられ、直に撰手及び隨行諸子と共に、雨天体操場裡に於て陶然懇話會を開ひて、茶菓を饗しぬ、時に日曦は稍々西に傾き、今迄の修羅場は、砂煙漠々たるの所、講堂の影を斜にうつし、たま〳〵懽然、談笑の聲を耳にするあるのみ、

附言、此戰あるに先だち、同志社撰手我に書を寄せて曰く、男らしきマッチを仕合はん、と我又元より茲に意あり、我運動界の眞主眼は一に區々たる勝敗を口にするを潔しとせず、蓋し其伎の如何は、自然に勝敗を生ずるの已を得ざるものゝみ、

這回我同志社の勁敵と戰ふや、相互の格鬪も、名乘り合ふて斬結ばん、双方の意氣、彼れ我に我又彼に、一点の敵意を示さず、技を觀る者、四邊に堆く、手ょ汗を握り、瞳を一心ょ凝らすは、觀る者の氣合、張り合、然れども彼等が心中は又、一点の敵意を搆ねず、白軍克く打てば思はず拍手し、紅軍克く打てば、知らず又拍手すア、男らしき哉。

我伎幸に彼に、勝を制せしと雖も、彼敗れて氣ます〳〵壯に、我又勝ちて少しも誇らず、日本の國士——中堅國民が何等の競爭も、皆かくあるべき也、ア、男らしき哉、

吾人は遠來の征客、之に待するの薄からんことを憂ふなり、

予は聊か公明正大なる眼の光を以て、双方の伎を概評せんかな、

一、我グラウンドの宜しからざるは、實に彼に取りて一大不利益の一ならん、雖然、苟も遠征を企つるものは、唯々其グラウンドの爲に、其伎を左右せらるゝが如きは、始より其心掛なかるべからずと信ず、

二、兩軍の撰手を看るに、其個人の伎に付きて、非常なる格段あるが如し、其ランニング、其捕珠、其バッチング其經驗熟達の度、ょ於て其各人の技に差異ある、寧ろ吾人は其力の平等なるを取るもの也、

三、兩軍の熟練の度を量るに、もとより我校は彼に一歩を避けざるべからずと信ず、

四、慌るナ、急そゲ、とは野球仕合の一大精神にして、慌てゝはアウトとなり、急いでは、ホームインとなる、經驗少なき我校撰手は、尙一層の練習ありたきものにこそ、

五、同志社軍が、攻擊の際、各壘下に隱れで、「ソレヘビーッとの「テークケャーとかの應援の聲は、莫大なる利益を、各ランナーに與へしならんと信ず、予は暫く之に就いて、何事をも言ふ克はず、

六、我軍壘三ベース守將と一ベース守將と、其身長に差異甚しきは不利益なり、山本氏の飛珠の往々大橋氏の飛び付き及ばざりしものありしは遺憾々々、

斯道專門家の視る所、尙何等の評すべく、又戒しむべきものありしならんが、此道に迂濶なる吾人此他を察するを得ず、即茲に筆を擱くと共に、再び此男らしき勁將等が、又來ん、セコンド、マッチの日を喝望し、ます〳〵我撰手諸君が、兜の緒を締め直し、精勵研磨、これ勤められんことを祈る、

（S、か、生）

◎大日本武德會第一回短艇競漕會參觀記

凡そ事物をやるのにはがら相應と言ふことがある。然るにがらに似合はぬ大任を帶びて我々は大津に擧行さるゝ大日本武德會第一回短艇競漕會を視察に行くやうになつた。視察、視察なる事は、一種の視察眼てふものをそなへなければ到底出來ないのもので勿論、吾々青二歳の夢想だに及ばないところである